

## 解説

田浪 亜央江



作者のムハンマド・ナツファアウは、現在のイスラエル領内で暮らすアラブ人（パレスチナ人）作家である。一九四〇

年、パレスチナ北部のガリラヤ地方（現イスラエル領内）にあるドゥルーズ教徒の村、ベイト・ジャンに生まれた。一六歳でイスラエル共産党に入党し、ヘブライ大学に二年間籍を置いたのち中退、農作業や建設現場を経て教員になり、一九七一年からは共産党事務局の専従となっている。何度か国会選挙に出馬したものの当選はかなわず、高名な詩人でもあった大物政治家タウフィーク・ザイヤーが任期半ばで辞めた後任として、一九九〇年から二年半、議員を務めている。冷戦終結後やオスロ合意後、多くの有力メンバーが共産党を去った後も党に残り、九〇年代末には共産党の事務局長を務めた。作家としては一九六四年から短編小説を執筆している。ドゥルーズ派コミュニティに生まれ

ているが、管見の限りではドゥルーズに焦点をあてた作品は見当たらない。共産党員の文学者でドゥルーズに属すると言えば、詩人のサミーフ・アルハカーシムが有名だが、アルハカーシムは八〇年代末に共産党を離れている。

ナツファアウは政治家としての存在感も、その作品も地味ではあるが、そこにはナクバ直後の状況、とくにイスラエル領内に残ったアラブ人が一九六六年まで置かれた軍政下のディテールが描かれており、当時に関心を持つ者には興味深い。ただし現在では使われなくなっているアンミーヤが多用されているほか、やや冗長で学術的な表現も多く、癖のある作風である。訳出した作品は、そうした傾向の比較的強くないものになっている。二つとも短編集『ナハリヤの林檎』（二〇〇一年）に収められている。

『サンムイー』は、パレスチナ北部のサブアド近郊にあった実在の小村（一九四五年時点で人口三二〇名とされる）で、イスラエル建国後にクファアル・シャマイーというユダヤ人の村（共同入植村）となった。第一次中東戦争中の一九四八年一〇月、上ガリラヤで展開された「ヒラム作戦」によってもとのアラブ住民は追い出され、イスラエル軍に占領されたのである。翌一九四九年六月から五〇年九月にかけ、イスラエル国家による「魔法の絨毯」という名の作戦によって、イエメンのユダヤ教徒約五万人がイ

スラエルに移送された。その一部がこのサンムイーに住んだのである。もとの住民のその後の詳細は不明だが、この作品から伺われるとおりイスラエル領内の近隣の村に移り、いわゆる「国内難民」となったようである。

「運転免許証」は、多少戯画化されてはいるが、本人の実体験に基づいて書かれたものようだ。イスラエル領内に残ったアラブ人がイスラエルの中でさまざまな差別を受けてきたという単純な話では済まない、彼らの置かれた特殊な状況ならではの、込み入った困難の一端を知ることが出来る。ソ連で運転免許を取得するところまでは共産党員としての「特権」であったはずだが、それが裏目に出た格好となり、しかしそんな「災難」を共有し、深く同情してくれる相手もいない。不幸や不運はそれ自体が絶対的に苦しいという場合はかりでなく、その不幸・不運の経緯が特殊で普遍化できず、誰とも共有できないこと、いわば「不幸の辺境性」こそが苦しいという場合もあろう。ただの「年寄りの愚痴」と見なされかねないひねくれた文体と作品世界は、多くの読者を獲得することなどはじめから期待してしまいがち。だからこそ近寄ってみたいと感じる読者も、少数ながらいるようである。